＜あとがき＞

ー人類は何処から来て何処へ行くのか？人間とは如何なる存在なのか？ーおそらく、永遠のテーマとも思われるこの命題について、太古から人類は議論し、頭を悩ませてきた。しかし、未だに根幹となるような論理すら提唱されていない。

生物学的見地からは、ある時点から突然脳の容量が増加し、考古学的見地からは、ある時突然高度な文明が現れたりしている。すべては神の思し召しなのか？そう言ってしまったら、何でも神の思し召しにしておけば良く、謎などは一つも存在しない。しかし、現実は謎に満ちている。故に、何か考察すべきことがあり、何か忘れていることがあるのではないか？

本論はそのような考えに立脚して、妥当性のある、辻褄の合う論を展開してきたつもりである。信じられる、信じられないは別として！そして、シュメールーより正確に言うならばシュメールの「神々」ーこそが人類史の根底にあり、日本もまた、いや、日本こそはその影響を最も受け、引き継いでいる国だという結論に至った。勿論、開示されていないこと、葬り去られたものもあるので、枝葉末節は間違っている部分もあろうが、根幹となる部分はこれに相違無いと考える。

これに対する反論はいろいろあろう。ニビルなどという惑星が本当に存在するのか？シュメールの「神々」の上に立つような絶対神はいないのか？

確かに、ニビルについて論じているのはシッチン氏の著書だけなのだが、引用した他の文献にも、粘土板に「神々の星」や宇宙船のようなものが刻まれており、たとえニビルという名称ではないとしても、そのような「神々の星」から飛来したことはまず間違い無いだろう。

また、本論では地球上に「神」という概念を植え付けたのがニビル人で、自らが「神、神々」として振る舞ったと見なしているが、だからと言って、宇宙創造の意識、いわゆる本来の絶対神などについて否定しているわけではない。＜神々の真相 1＞を良く読めば、そこに“万物の創造主”という名称が登場し、イナンナがエンキから奪った“メ”には“司祭権と筆記権の神聖な公式”もあった。ならば、彼ら「神々」が故郷の星で司祭として祀っていたのは“万物の創造主”ということになろう。すなわち、この宇宙を創造した“万物の創造主”＝宇宙創造のエネルギー体が存在することは間違いない。何よりも、知能を有する我々人類の存在自体がそれを裏付けるだろう。他にも、地球（ガイア）意識などというものも存在するのかもしれない。

しかしながら、本論ではそこまで立ち入ることはしなかった。というのも、そこまでのレベルになると、物理学や生物学、化学の分野まで巻き込んでの科学的議論が必要となり、本論で言うところの“人類史の真相”という観点からは、ずれてきてしまうからである。まずは、そういった存在にご登場頂くこと無く、人類史は十分説明できるでしょう、という提言でもある。

ならば、現在の神殿や寺院には「神、神々」がもぬけの殻となっている、と

いうことである。しかし、創造のエネルギーが電磁波的なものであるならば、地球上にもそれと共鳴する場所があり、そのような場所に神殿や寺院が建てられたとしたら、その最奥には創造のエネルギーが祀られているとも見なせるわけである。古代から、日本人はあらゆるものに神聖を見出してきたが、その根底にはこのような考えがあったから、なのではなかろうか。
　もし、本当に「神々」が降臨するのなら、真相はどうなのか、直接伺ってみたいものである。

　本論は、様々な論議を巻き起こすだろう。それにより、とりわけ国際銀行家（国際金融資本）集団にとって“不都合な真実”も明らかとなっていくだろう。しかし、この抜かれた“剣”はもう二度と鞘に戻されることは無い。そして、すべてが白日の下にさらけ出された後、日本が主体となり、聖徳太子が言われた“和を以って貴しと成す”理想郷が全地球レベルで達成できれば、この上無い幸せである。

　最後になりましたが、このような研究を行うきっかけとなった飛鳥昭雄氏、並びに、引用させて頂いた著者の方々に、この場を借りて感謝します。
　とりわけ、何処の馬の骨とも解らない男と面会して下さり、貴重な助言の数々をお与え下さり、最後にはこの国の最高神の御名までお教え頂いた元伊勢・籠神社・第 82 代宮司・海部光彦様には、感謝してもしきれません。この場をお借りして深く御礼申し上げ、奇遇な御神縁に感謝する次第です。

第 62 回式年遷宮癸巳の年、如月旧正月